

日本医科大学前身の濟生学舎 — 濟生救民と長谷川泰をめぐる人々 —

志村 俊郎^{1,2} 弦間 昭彦³

¹独立行政法人東京労災病院第二臨床検査科

²一般社団法人日本医史学会

³日本医科大学

Saiseigakusha, the Predecessor of Nippon Medical School:
Philosophy of Saisei-Kyumin and Associates of Tai Hasegawa

Toshiro Shimura^{1,2} and Akihiko Gemma³

¹Department of the Second Clinical Laboratory Medicine, Japan Labour Health and Safety Organization Tokyo Rosai Hospital

²Japanese Society for the History of Medicine

³Nippon Medical School

Abstract

This is a report about Saiseigakusha, the predecessor of Nippon Medical School, which advocated “Saisei-Kyumin”, a philosophy that obliged Saiseigakusha to extend social and frontline medical support to ordinary people during the Meiji Era. Founded in 1876, Saiseigakusha was one of the most prominent private medical schools of the time, and it produced a large number of caring and skilled doctors to carry out the tenets of Saisei-Kyumin. The mission of Saiseigakusha’s founder, Tai Hasegawa, was to foster excellent doctors who practice medicine with “selfless devotion to patients and society”, and this also became the mission of his school. It was Hasegawa’s conviction that medicine must engage deeply with society and people’s lives, and he dedicated great effort to public health administration so that priority could be given to saving people in financial difficulty, which is the core principle of “socialized medicine”. This paper examines the teachings and wise words of such medical professionals who studied at Saiseigakusha as Chuta Oguchi, Kenzo Suto, Hideyo Noguchi, Norihiko Asakawa and Tetsuzo Sugano, whose wisdom still shines now as it did then, and explores their personalities and encounters with outstanding medical visionaries. The history of Saiseigakusha and its contributions to medicine will continue for generations to come to be studied and to guide the medical education given at this school and the future of medicine and health care.

(日本医科大学医学会雑誌 2022; 18: 86–97)

Key words: Saiseigakusha, Saisei-Kyumin, Tai Hasegawa, historical figure

Correspondence to Toshiro Shimura, Department of the Second Clinical Laboratory Medicine, Japan Labour Health and Safety Organization Tokyo Rosai Hospital, 4-13-21 Omori Minami, Ota-ku, Tokyo 143-0013, Japan

E-mail: t-simura@nms.ac.jp

Journal Website (<https://www.nms.ac.jp/sh/jmanms/>)

緒言

日本医科大学は、140年を越える歴史を有する我が国最古の私立医学校であります。その前身である済生学舎は、1876（明治9）年に長谷川泰により創立されました¹²。この明治初期の社会的変革期において、外国との交流拡大によりコレラ・赤痢等の流行が多発し、済生学舎は、そのため西洋医を速成すべく設立された私立医学校でありました。その建学の精神は、当時の庶民の医療に寄り添う「済生救民」でありました。その後、済生学舎は、1884（明治17）年3月に東京医学専門学校済生学舎（以下、済生学舎と略す）と改称され、1887（明治20）年には文部大臣森有礼（ありのり）に特別認可学校書類を提出し、文部省令第三号改正第五條（明治21年5月）により特別認可学校に指定を受けました³。本学は、庶民の医療を支え病める人にやさしい良医を育成して地域医療と社会に貢献し、同時に野口英世をはじめ多くの医学・医療者を輩出しました¹。

本稿では、済生学舎出身の代表的医学者5名とその知友が社会にのこした、現代および未来にも通じる幾多の教え、心にのこる言葉と各偉人の著書について述べます。この済生学舎卒業の代表的医学者5名は、国立大学学長となった小口忠太、須藤憲三、また、世界的細菌学者の野口英世、そして北里柴三郎門下の浅川範彦、さらには野口を『順天堂医事研究会雑誌』へと導いた菅野徹三であります⁴。

以下では、明治期の医学・医療史における済生学舎の歩み、および、本学で医学を修めた先学による遺訓ともいえる名言格言について概観します。

1. 明治初頭の医療環境における済生学舎と地域社会との共生

明治期の医療者と地域社会との共生として当時の庶民の医療背景を述べます。明治初頭の日本の人口は、約3,300万人でありました。明治初期は、従来の社会階層の解体と再構築が、急激に進行し、農村における凶作などによる農民や、社会からはじき出された貧民が増加し、大都市に流れ込んでいきました。また、窮民の救済は、当時の中央政府に窮民救済に対応するしっかりとした本拠がなく各府県に任せられていました⁵。1874（明治7）年に明治政府が生活困窮者の公的救済を目的として、日本で初めて統一的な基準をもって発布した身寄りのない貧困者のみに地方官の救貧施

行権を認める救貧法である恤救規則（じゅっきゅうきそく）ができました⁶。同じく1874（明治7）年には、76カ条よりなる医制が東京、京都、大阪の三府に布達され、日本の近代的医療制度が始まりました⁷。しかし、この医制の実相は、医業の許可制などを定め、衛生行政の方針を示した訓令・指針の性格を有してはいましたが、実務の具体性に欠けるものでした。明治政府の掲げた病院本来の目的は、貧困者の施療でありましたが、その後、前述の救貧対策を優先せざるを得ないために施療を次第に放擲するようになっていきました。また庶民の医療としては、1875（明治8）年にわが国最初の公衆衛生行政を生み出した長與專齋が内務省初代衛生局長に就任するまでは、先述のようにこの頃ははまだ中央政府にしっかりとした本拠がないため、具体的施策の多くは地方自治体に衛生担当官として置かれていた医務取り締まりが担っていました。社会経済状態と同じく医療保護も地方に転化され、実際は、地方自治体と開業医に委ねられていました。これらの中にあっても、長與專齋初代衛生局長は、病気を予防するために清潔な状態を保つことのHygiene（へいじいん）の訳として「衛生」の語を残しており、この時早くも1876（明治9）年長與の衛生意見書で、「貧民の救済と流行伝染病の予防」を述べています⁸。そこへコレラを始めとする急性伝染病の大流行が頻発し、そのため人民の生活は、さらに窮乏化しました。コレラ被害の拡大は、上下水道の不備や、都市下層民の栄養不良によるところが大きく、伝染病の被害は特にスラム地区に集中していました⁹。そこで、長谷川泰は、内務省衛生局長時代（明治31～35年の在籍）に尽力し、下水道法と現在の清掃法の前身である汚物掃除法を制定し、東京市においては下水道の築造、土地所有者および市に対するごみ、汚泥、し尿などの清掃、収集義務が定められました。また長谷川泰は、更に現在の「食品衛生法」の前身となる「飲食物其他ノ物品取締ニ関スル法律」（1900（明治33）年2月24日法律第15号）を成立させたほか、「有害性着色料取締規則」、「清涼飲料水営業取締規則」等、多くの諸規則類を制定し本法律に実効性を持たせています¹⁰。長谷川は、これらの清潔法や飲食物取り締りなどの衛生行政への貢献を通して、生活困窮者のために奔走しました。ここで今一度当時の医療環境の背景となる病気の内訳と実数を記載します。1880（明治13）年の統計年鑑によれば、人口35,928,821人のうち、1位は流行病（122,742人）であり、次いで消化器病（102,348人）全身病（82,070人）、神経系病（79,572人）、呼吸器病（72,204人）の順であり、現在の感染症が1位であり

ました(括弧内は病死者及び患者人員数)。これらの急性伝染病対策の契機になったのは、1877(明治10)年以降に発生したコレラの大流行であり、1879(明治12)年のコレラ患者(括弧内は死亡者数)は162,637人(105,786人)、1886(明治19)年は155,923人(108,405人)でいずれも死者が10万の大台を超える高い死亡者数でありました。また1887(明治20)年より1896(明治29)年の赤痢患者数も、68万人と著しく増加しました¹¹。

次に、伝染病予防と共に喫緊の課題となった西洋医不足の対策になった医術開業試験について述べます。本試験は、医制37条(改正後の19条)に規定されています。はじめに「修学」別に見た医師数の推移の背景から済生学舎の社会における位置付けを書き表します。1874(明治7)年の医師数は、28,262名(漢方・西洋の両資格を有する人を含め漢方医23,015名、西洋医5,274名)で、漢方医が約8割に当たり圧倒的多数でした。1875(明治8)年には、医術開業試験が内務省により東京、京都、大阪の3府で始まり、年4回施行されました。その後、1883(明治16)年(同年の医術開業試験規則から、全国9カ所、年2回実施)においても、いまだその医師数は、39,669名で、その内訳は、医術開業試験2,833名、大学と専門学校卒業393名、府県免許医(漢方医と試験制度前の免許者を含む)33,761名とその他、でありました(図1)¹²。この頃より医師の社会における役割は、多くの大学卒業生は主に医学の進歩に、医術開業試験及第者は医学・医療の普及にという構図が徐々にできあがっていきました。1903(明治36)年8月までに、西洋医学を学んだ医師は20,000名、医術開業試験及第者は合計14,833名でその内済生学舎出身者はその同窓会名簿によると実に9,628名¹³、当時の我が国の医師の約半数にあたり、庶民の医療を担う開業医では約6割以上を占めていました。ここでは庶民の地域医療に貢献した明治期の私立医学校における済生学舎の臨床医学教育についてその概要を述べます¹⁴。済生学舎は、1886(明治19)年には付属病院である蘇門病院(病床数20床、患者数は、年間入院、外来あわせて711名)が付設され医術開業後期試験科目の主に第六臨床実験に対応しておりました。このように済生学舎は、基礎医学のシラバスと共に臨床実地を重視する教育で、1896(明治29)年12月東京医学専門学校済生学舎規則(明治31年2月改正)にみられるように当時よりシミュレーション教育まで行う実践的な臨床医学教育を特色としており(写真1A, B)¹⁵、それゆえに医術開業後期試験、特に済生学舎卒業の野口英世、吉岡弥生も受験し

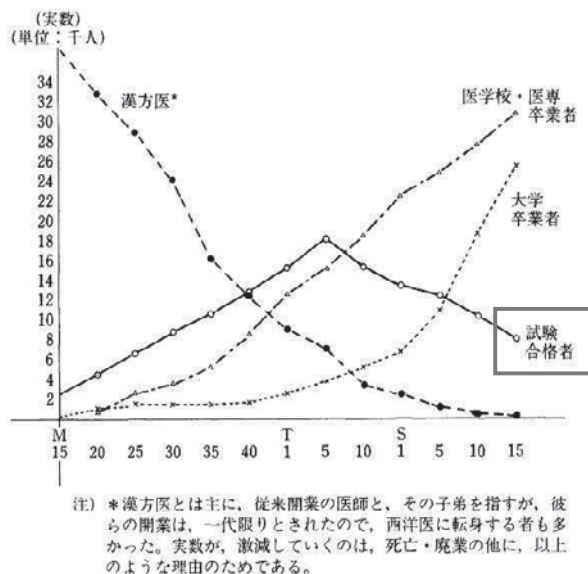


図1 修学別にみた医師数の推移(実数)
(教育社会学研究. 1992; 51: pp136-153(文献12)
より一部改変して転載 日本教育社会学会より許諾)

た臨床実験の合格率が高く、よって同校の志望者数も多かったといわれています。

次に、明治期の女医の歴史と、誕生までの苦難の歩みを述べます。1883(明治16)年10月太政官布告第35号「医師免許規則」第7条により医師の医籍登録が定められました¹⁶。それより最初の医籍登録者は、1884(明治17)年3月男子医学生(中野啓覚、1885(明治16)年東大医学部別科卒業)に内務卿山縣有朋より日本第一号の医術開業免状の医師免許証が公布され医籍に登録されました。そこで当時の女子医学生の荻野吟子、生沢クノ、高橋瑞子は、女医の医籍登録許可を東京大学医学部総理心得兼任(1879(明治12)年)で後の陸軍軍医総監(1890(明治23)年)になった石黒忠恵や長與專齋衛生局長(明治8~24年の在籍)等に請願しました。1884(明治17)年9月に明治政府は、女医の医籍登録を、認可致しました。女医第1号は、好寿医院医学校(1879(明治12)年設立)卒業で1885(明治18)年12月医籍登録の荻野吟子です。女医第2号生沢クノが1883(明治16)年9月に埼玉県令吉田清英に提出した医学試験請願書には、婦人科では医師と患者さんが同性であることが、女性患者さんにとって望ましいと女医の有利性を記載しておりました¹⁷。生沢クノは、私立東亜医学校(1882(明治15)年設立)・済生学舎卒業で1887(明治20)年3月医籍登録されました⁴。第3号の高橋瑞子は、1879(明治12)年より産婆修行をし1882(明治15)年内務省産婆免許を取得した後に医学へ転身しました。瑞子



写真1 濟生学舎の臨床医学教育

A 東京医学専門学校濟生学舎規則（明治31年2月改正，頁19）

（日本医科大学中央図書館所蔵（唐沢信安より寄贈））

B 濟生学舎實地演習講義シラバス 大國藏書印

（日本医科大学所蔵（濟生学舎ギャラリー））

は、濟生学舎を卒業し1887（明治20）年12月に医籍登録されました¹⁸。この頃より濟生学舎は、西洋医学を学ぶ日本で最初の男女共学の私立医学校となり、濟生学舎同窓会名簿によると136名の女医を養成しました¹³。このうち濟生学舎卒業で、第1号女医の高橋瑞子は、医師になった後に1885（明治18）年順天堂医院で医学実地研修後、東京市日本橋で開業しました。その後当時では珍しく1890（明治23）年にドイツのベルリン大学に聴講生として留学もしています。また東京女子医科大学の創設者吉岡弥生（1871～1959）も濟生学舎の卒業生で1893（明治26）年5月に医籍登録し、日本で27番目の女医となりました。その他庶民の女性医師の代表としては吉岡弥生の濟生学舎同級生である1894（明治27）年8月に医籍登録した中原蓮が挙げられます。中原蓮は、一人一人の患者に寄り添った医療を行った山口県の小さな町の開業医で、1962（昭和37）年には山口県長門市三隅町名誉町民となった山口県女性医師第1号でありました¹⁹。

しかしながら、1903（明治36）年3月27日専門学校令勅令61号が施行されるに至り旧制専門学校の規定が定められ、専門学校に関しては、この勅令により認可されることになりました⁷。濟生学舎は、1903（明治36）年8月30日『東京日日新聞』に、長谷川泰の「濟生学舎の廃校宣言」が出て突然閉校しました。その後、引き続き1903（明治36）年9月同窓医学講習会から私立東京医学校と私立日本医学校を経て1912（明治45）年7月財団法人私立日本医学専門学校が設

立されました²⁰。

次章に、濟生学舎の建学精神に至る序奏と濟生学舎出身の5名の代表的医学者とその知友が社会に遺した、現代および未来にも通じる幾多の教えと心に残る言葉（以下鈎括弧内に記述）とその学者らの遺した著書を中心に各偉人の医学者像を概観します。

2. 濟生学舎の建学精神に至る序奏

濟生学舎の建学精神は、長谷川泰の「濟生救民」であり、その語源は「病気に苦しむ民衆を救うのが医師の最も大切な道である」とされています。しかし、長谷川がこの思想に至った道程については、これまで本学においてもあまり語られてはきませんでした。

本稿では、その源泉であるポンペ・ファン・メールデルフォールト（1889～1908）（以下ポンペと略す）²¹から佐藤尚中をへて長谷川泰に至る地下水脈について述べます。明治初期の蘭方医、順天堂第2代堂主佐藤尚中（1827（文政10）年～1882（明治15）年）は、1860（安政7）年、長崎に留学し、オランダ海軍軍医ポンペ（ユトレヒト陸軍軍医学校出身）の指導によるヨーロッパ式病院、つまり小島養生所ならびに長崎医学伝習所に入所し、松本良順（1832～1907）らと共に学びました。松本はすでに1857（安政4）年から同伝習所でポンペの教えを受けていました。このヨーロッパ式病院では、貧民への診療費の請求はなされず、治療が実践されていました。その後、ポンペによれば優れた



写真2 フーフェラント Christoph Wilhelm Hufeland (1762～1836) の内科書『扶氏経験遺訓』の原典 小此木病院蔵書印 (日本医科大学中央図書館所蔵 (橋本泰彦より寄贈))

外科医である佐藤尚中は、佐倉に戻り、西洋式病院の佐倉養成所を開設しました。

長谷川泰はこの佐倉養成所の門人となり、師の佐藤尚中と共にクリストフ・ヴィルヘルム・フーフェラント (1762～1836) の医書『扶氏経験遺訓』ドイツ語原典 (Enchiridion medicum 3. Aufl., Berlin: Jonas, 1837) のオランダ語版を訳述し、西洋医学を学びました (写真2)²²。

長谷川泰はこのオランダ語版巻末の「医師の義務 *De Verplichtingen des Geneesheers* (医戒)」の章を重視し、この章の精髓ともいえるべき「済生救民」の理念を畢生の理念としました。また、先にも述べた長谷川泰の西洋医学思想への源流ともなるオランダ人医師ポンペは、5年間 (1857～1862) の長崎医学伝習所時代、「頼みにする者をもたない病める者」に対して「医師はよるべなき病者の友である」という言葉を遺しています²³⁻²⁵。この至言警句は、本学の学是「克己殉公」つまり「己を克ち広く人々のために尽くす」にも地下水脈として流れ、当時の済生学舎から現在の日本医科大学まで脈々と継承され、現代にも通じる患者中心の医療における良医の原点と言っても過言ではありません。

このように、ポンペが遺した言葉は、医療は患者中心であるべきだとする思想を門下生に説いたものであり、いうなればポンペによる“医戒”とも言えます。すなわち、医師と患者は、社会的身分にはとらわれず、

ひとしく自由かつ平等であるべきとし、それがこの「医師はよるべなき病者の友である」に凝縮されています。この言葉は、したがって“ヒポクラテスの誓い”、つまり「医師の心得は患者の利益になる」という医の職業倫理に一脈相通じているのみならず²⁶、ドイツの内科医フーフェラントの「医戒」による「病める人に対する愛」にも通底し、人間のための医学・医療の基本理念であり、崇高峻厳なアフォリズムであると考えます。

これらポンペの“医戒”は、松本良順・佐藤尚中ら主要な門弟において強い影響が見られ、したがってまさしく佐藤尚中の高弟である長谷川泰もまた、その言葉の本義精神をなしとげたものと思われる。このように、本章は、幕末に来日して長崎養生所を設立したポンペの、いうなれば“医戒”が本学創立者長谷川泰の医学精神に流入し、さらにそれが現在まで本学に地下水脈として流れていることを述べたものであります。

このような精神は絵画ではポンペの祖国オランダ17世紀の画家ファン・レイン・レンブラントの代表作「夜警」(1642年) (文献27作品14) と「テュルプ博士の解剖学講義」(1632年) (文献27作品5) にも表されています。前者は、ひとりの人物のみが描かれた単独肖像画ではなく、幾人もの人物が描かれた集団肖像画であり、画面の市民たちの人格がそれぞれに描かれています。また、後者は、いわゆる当時の“解剖の劇場”であり、デュルプ博士による人体解剖の実際を幾人もの市民に解説している画題です。ここには、事実を直視するリアリズムともいえるべき思想が描かれています。当時、すでにこうした市民社会が成立しており、それが200年余の後、長崎で病者の身分にとらわれずひとしく医療活動に専心したポンペにも継承されてきました。

3. 済生学舎出身の代表的医学者とその言葉

小口忠太 (1875 (明治8) 年～1945 (昭和20) 年) は、1875 (明治8) 年1月6日長野県小県郡上田町の生まれで、県立愛知医科大学 (現名古屋大学) 学長を務めました (写真3A)。小口は、1891 (明治24) 年医術開業後期試験に合格し済生学舎を若干17歳で卒業しました。東京帝国大学の選科生として河本重次郎教授の指導を受け、1907 (明治40) 年、先天停止性夜盲の一型の「小口病」(Oguchi disease) の発見者として世界に広く知られております²⁸ (写真3B)。「小口病」のように世界で知られている日本人の個人の名

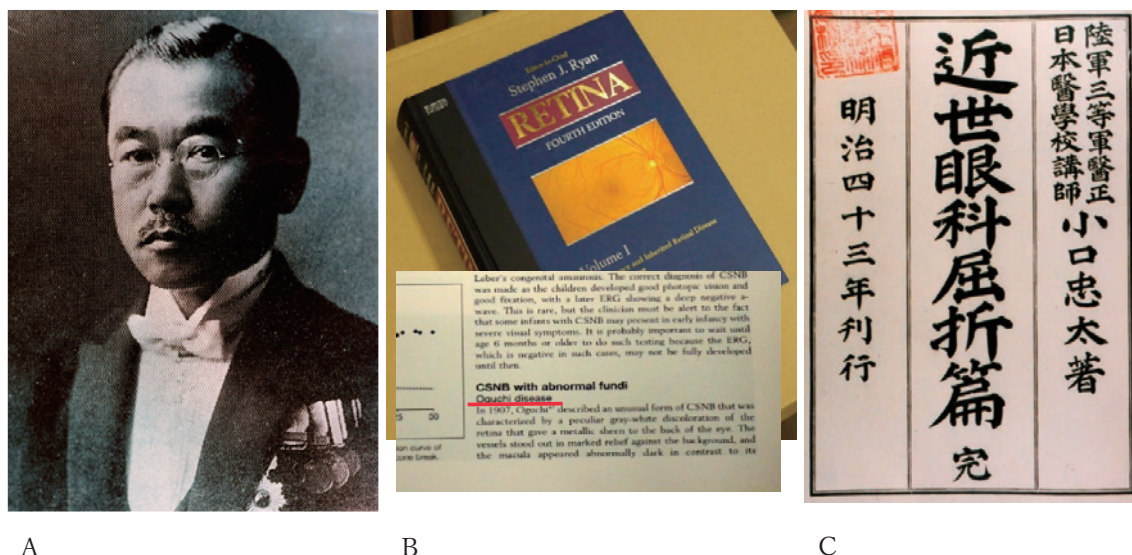


写真 3

- A 小口忠太 済生学舎 明治 24 年卒 愛知医科大学（現名古屋大学）学長
（慶應義塾大学医学部眼科 小口芳久先生より使用許諾）
- B Oguchi disease（文献 28）
- C 小口忠太の著作 近世眼科屈折篇 発行 半田屋医籍商店 1910（文献 30）
（国立国会図書館 Web サイトより転載）

前がついた病気は、よく知られている病気で 11 病名、全体でも 40 病名以上と少ないとされています²⁹。

小口忠太は、1905（明治 38）年より 1912（明治 45）年まで陸軍軍医学校教官ならびに陸軍医務局御用掛けとなりました（1910（明治 43）年 1 月 17 日任陸軍三等軍医正に叙任辞令を授与される。官報第 7967 号）。その間に、小口の本学との関連は、1910（明治 43）年に私立日本医学校において「眼科屈折篇」の夏期講習会を行いました³⁰（写真 3C）。小口は、1912（明治 45）年 1 月より 1914（大正 3）年 7 月まで独ハイデルベルク大学に留学し、1916（大正 5）年 6 月 23 日東京帝国大学医科大学より医学博士の学位を授与され（官報第 1168 号本文）、大正 8 年愛知県立医学専門学校眼科教授に招聘されました。その後 1929（昭和 4）年国際眼科学会理事になり、1933（昭和 8）年には帝国学士院賞を受けています。小口忠太の弟子の育て方に関しては、厳しい教育で有名で、常日頃弟子に「教育は、与えてもらうものではなく、自分で学ぶ」ことを、促していました。

その他、小口が常日頃述べていた言葉は、Oguchi disease の記載が見られる教科書 *RETINA* (ELSEVIER MOSBY 出版社発行)²⁸ に記載があるように「研究を行うなら百年後も教科書に載る研究をする」であります（写真 3B）。小口の多くの著作および論文（原著論文数 67 編）の業績³¹がこのことを示しています。

須藤憲三（1872（明治 5）年～1934（昭和 9）年）は、1872（明治 5）年 1 月 10 日山形県の羽前国置賜郡赤湯村の生まれで、旧制金沢医科大学（現金沢大学）学長を務めました（写真 4A）。須藤憲三は、日本における糖尿病研究の先駆者であり、尿糖の定量法を確立しました。私立東京医学院に学び 1890（明治 23）年医術開業前期試験に及第後、済生学舎に入学し 1892（明治 25）年医術開業後期試験に合格、済生学舎を卒業しました。同年 9 月東京帝国大学の生理学教室の選科生となり、1894（明治 27）年 6 月東京帝国大学医学部隈川宗雄教授の助手となり、脂質代謝を研究し、「Pavy—隈川—須藤の糖及び脂肪の定量法」は特に知られており、その定量法は、東京大学本郷キャンパス内の東京帝国大学医科大学隈川宗雄学長の胸像にも隈川の略歴内に記載されています。そして須藤は、日本における「栄養」という言葉の提唱者でもあり、医師として栄養学の振興に功績のあった人でもありません^{32,33}。

また、彼は、多忙な生活の中、母校の済生学舎で 1901（明治 34）年から生理学、医化学の講義を担当しました。1912（明治 45）年より 3 年間ドイツのベルリン大学カイザーウイヘルム研究所に留学し、その留学中には金沢医学専門学校教授に任ぜられました。1914（大正 3）年に帰国後、同校に生化学教室を創設しました。同校は、1923（大正 12）年に旧制金沢医科大学



A

須藤の言葉「実験では世界一」



B

写真4

- A 須藤憲三 済生学舎 明治25年卒 旧制金沢医科大学（現金沢大学）学長
（山形県南陽市より使用許諾）
B 研究室の須藤憲三と須藤の言葉「実験では世界一」
（写真挿入）（文献34）
（山形県南陽市より使用許諾）

学に昇格し、翌年より同校の第2代学長に選任されました。その人となりについては、須藤は、東京帝国大学医科大学内科学第一講座教授の青山胤通に言わしめて「須藤先生は、エンサイクロペディアと言われる如く博学者」であったとのこととあります。また研究室にいつもこもり実験装置を考案する能力にも長けており、自らも「実験では世界一」と自負しておりました（写真4B）³⁴。

野口英世（1876（明治9）年～1928（昭和3）年）は、1876（明治9）年11月9日、福島県猪苗代町に生まれた世界的細菌学者であります^{35,36}。この生誕年は、

奇しくも済生学舎創立の年でもあります。野口清作（幼名）は、1895（明治28）年4月会津若松の日本基督教若松栄町教会で受洗しました。1896（明治29）年上京し、9月医術開業前期試験合格後、済生学舎に入学し、医術開業後期試験にも合格し、1897（明治30）年に済生学舎を卒業しました（写真5）³⁶。野口英世の医術開業免状には、内務大臣西郷従道（つぐみち）と衛生局長 長谷川泰の名前が見られます。

その後、高山齒科医学院の血脇守之助の推薦により1897（明治30）年11月順天堂医院に勤務した後、佐藤進院長の添書を持参し、北里柴三郎に面会し1898（明治31）年10月に伝染病研究所技師補となっています。その間、1899（明治32）年1月にクレメンス・フォン・カールデン著『病理学的細菌学的検術術式綱要』を渡部鼎と共に纂譯し、この本には北里柴三郎が序文を寄せました。

野口の済生学舎在籍の記述については、東京大学の附属機関、医科学研究所（旧伝染病研究所）の1899（明治32）年以降1916（大正5）年3月までの履歴綴に残されています。この野口自筆履歴書には「明治29年11月4日より明治30年8月30日まで済生学舎ニ医術ヲ学ブ」とあります。また『野口英世書簡集IV』（財団法人野口英世記念会発行）には、「小生4月1日に済生学舎より入舎いたし」（野口より小林栄宛の明治30年3月31日付書簡）とあります³⁷。野口は約半年間済生学舎に在籍して最短期間で卒業しました。彼の済生学舎時代の直筆の筆記ノート『細菌学手記』には、「**Ⅰ** 微生物生体種、**Ⅱ** バクテリア等」（細菌の分類）（写真6A）から始まり「**Ⅲ** コッホ氏のツベルクリン製法」（写真6B）までが書かれています。野口が世界的な細菌学者となったのは、当時済生学舎の微生物学非常勤講師であった坪井次郎がドイツで学んできた、最新の細菌学講義によって知識を得ていたためです。後に坪井次郎は、明治32年京都帝国大学教授兼医科大学学長に就任しました³⁸。

1915（大正4）年9月より11月まで、日本に一時帰国した野口に対し、済生学舎同窓生による歓迎会も開かれました。その際、野口は、多くの野口英世語録および揮毫を残しています。そのなかでもとくに印象深い言葉は、野口英世記念館が所蔵している二つの揮毫であります。この揮毫には「忍耐」、それに済生学舎の「済生」の2語が墨痕あざやかにしたためられています。これは、フランスの格言「忍耐は辛苦であるが、その時代結果は甘美である」（原典は18世紀フランス啓蒙思想家ジャン＝ジャック・ルソー）に源泉をもち、会津若松時代の野口が先述の日本基督教会山口

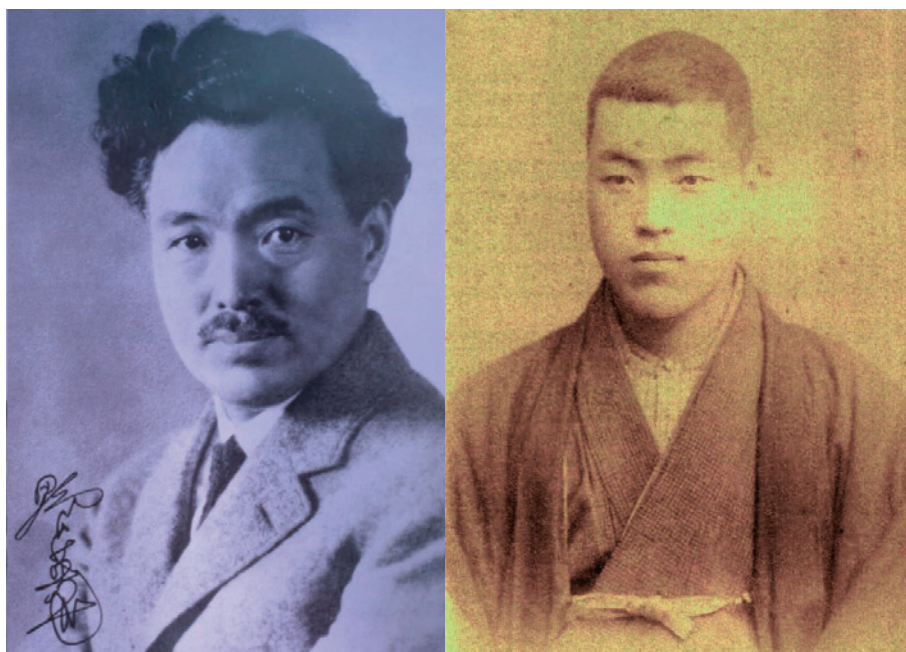


写真5 晩年の野口英世(左)と済生学舎時代の野口英世(右)(済生学舎 明治30年卒)
((公財)野口英世記念会より使用許諾)



写真6 野口直筆ノート「細菌学手記」
((公財)野口英世記念会より使用許諾)

鹿三牧師から教えられたものでした³⁹。

また1939(昭和14)年には、野口英世記念館が設立されました。同年5月21日の野口英世家跡保存式典において、済生学舎1897(明治30)年卒業の野口と同期である同窓会会員総代大野喜伊次が述べた祝辞で、野口観を次のように吐露しています。「野口は、官立大学でなくても、校舎が粗末であっても、経済的に苦しくても、努力によって人類のためにすばらしい

研究を遺した。後世の若い人たちに勇気を与えた。」(写真7)。

最後に、さらに野口の人となりを知るうえで、野口が後世の若い人たちに残した素晴らしい研究、すなわち米国での業績について述べます。日本人の研究者が多く留学した米国の世界的に有名な研究所には、アメリカ国立衛生研究所(NIH)(1887(明治20)年設立)やロックフェラー医学研究所(1901(明治34)年設

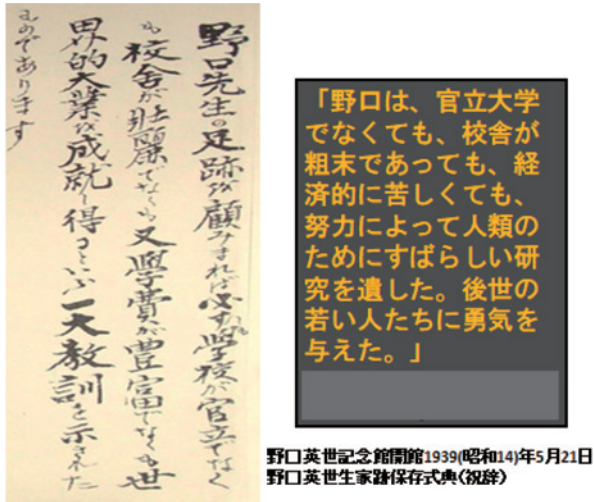


写真7 野口英世の同級生の済生学舎明治30年卒
済生学舎同窓会員総代 大野喜伊次 祝辞
((公財)野口英世記念会より使用許諾)

立)等があり、すでにこれらへの本学留学生も多くの立派な業績を発表しています^{40,41}。野口もまた、ロックフェラー医学研究所に留学し、その後、3度のノーベル賞候補になった論文を含み計189篇の英語論文(米国にて1902~1929年の期間で執筆)を残しています⁴²。これら野口英世の論文は、現代に至るまで全世界で広く引用されており⁴³、その意味でも野口の業績は、先に小口忠太が述べた如く、まさしく「百年後も教科書に載る研究」といえます。それらにより米国ニューヨーク市のロックフェラー医学研究所の図書館前には創始者ロックフェラー一世(ジョン・デイヴィソン・ロックフェラー・シニア)と並んで野口英世の胸像(1927年作)が建てられています(写真8)。

以下その他の各代表的医学者の略歴においても、とくに野口英世との出会いを追記します。

浅川範彦(1865(慶応元)年~1907(明治40)年)は、1865(慶応)元年1月高知県にあたる土佐国土佐郡秦村に生まれた世界的細菌学者北里柴三郎門下生でありました(写真9)。1880(明治13)年県立高知医学校で学び、その後上京し、済生学舎に入り、1年で医術開業試験に合格し、1883(明治16)年済生学舎を卒業しました。1894(明治27)年北里柴三郎所長を慕って伝染病研究所に入所し、ジフテリア血清療法の研究に従事しました。1896(明治29)年当時の最高レベルの教科書である『実習細菌学』を北里柴三郎と共著で出版しました(写真10)⁴⁴。野口英世は、1898(明治31)年に伝染病が突発的に起こってもこれに対処できる内務省管轄の国立伝染病研究所になる前年の伝染病研究所に技師補として採用されました。1899(明

治32)年内務省伝染病研究所創立と同時に第三部長(予防消毒、治療材料検査担当)であり講習会の責任者としても重責を果たしました。その間も野口にペスト菌やジフテリア血清の作り方、ワクチンの基本的作成方法を教授したと言われております。これらの伝染病研究所の浅川のもとでの実績もその後の野口の米国での功績の礎になりました。そのように浅川の丹念に追及していく研究手法は「探偵的研究」とも呼ばれていました⁴⁵。また浅川は、北里柴三郎門下の英才であり、従六位に叙位され1901(明治34)年北里門下第1号の医学博士となりました。しかし、痛恨の極みであります。1907(明治40)年42歳の若さで夭折しました。北里は、この浅川の業績を記念して、1909(明治42)年「故医学博士浅川範彦君記念奨学資金」細菌学賞「浅川賞」を設けました。これは、細菌学の最も古い名誉ある学術賞であり、1959(昭和34)年に「日本細菌学賞」と改称され、現在に至っております。

菅野徹三(1863(文久3)年~1916(大正5)年)は、1863(文久3)年福島県相馬郡に生まれ、27年間『順天堂医事研究会雑誌』の編集主任でありました(写真IIA, B)^{46,47}。彼は相馬藩医菅野三徹の長男で士族でありました。はじめに旧本郷区本郷臺町の「獨逸学校」でドイツ語を学び、1885(明治18)年に第一高等中学校(大学予備門)を退学して済生学舎に入学し、26歳で1888(明治21)年に医術開業後期試験に合格し、済生学舎を卒業しました。その後、1891(明治24)年にヴィルヘルム・ロイベ著『内科診断学』各論4冊を纂訳しました⁴⁸。野口を伝染病研究所に送り出すにあたり、『順天堂医事研究会雑誌』に以下の餞別の言葉を送っています⁴⁹。野口の人物像についてさらに知るために、その言葉を記載します。野口は屈指の有名人であると述べた後で「野口清作君、氏の如きは蓋し有数の士と請うべし」と紹介しています。

菅野については、1901(明治34)年済生学舎講師をつとめた後に日本医科大学第二代学長に就任した小此木信六郎¹は、ギリシャのヒポクラテスの言葉³⁰「医にして高士なれば、その人は神の如し」から、志が高く立派な人格を備えていると述べた後で「高士とも云うべき菅野君」と称えています⁴⁷。

おわりに

一済生学舎の医史から医学・医療の未来を学ぶ一

明治期庶民の医療環境において、「済生救民」、すなわち社会で互いに支え合い病を癒し共に生きる共生の思想をたどり日本医科大学前身の済生学舎について述

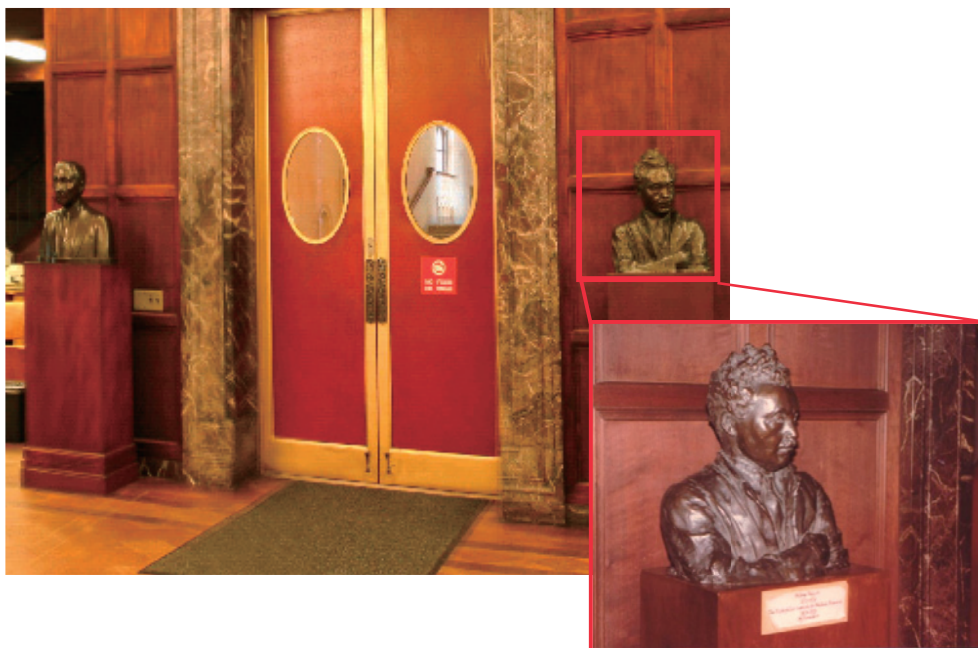


写真8 米国ロックフェラー医学研究所図書館前の野口英世の胸像



写真9 浅川範彦 済生学舎明治16年卒
(学校法人北里研究所より使用許諾)



写真10 浅川範彦が実習生の教育に使った細菌学の教科書(文献44)
(学校法人北里研究所より使用許諾)

べました。

この明治時代を代表する我が国で最も古い私立医学学校である男女共学の済生学舎は、先述のように1876(明治9)年に創立され、多くの心優しき良医を育て、庶民に寄り添い地域医療を支えてまいりました¹⁵⁾。

済生学舎は創立者長谷川泰のめざした、病める人に慈しむ心でもある「済恤」(さいじゅつ)の心(明治10年「区医職務心得」甲98号)³²⁾すなわち「慈悲の心」

を持った良医を育てるべく医学教育を実践してきました。長谷川は、医学が社会や生活と深くかかわるべきだという信念から、いわゆる「医療の社会化」の原理をなす“困窮する人を扶ける事”を嚆矢として公衆衛生行政にも専心してまいりました。

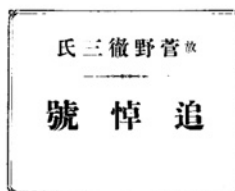
また長谷川は、東京府病院長(明治9~14年の在籍)を兼務していた当時、早くから当時の第6代東京府知



A

順天堂医学研究会 誌 雜

第 十 三 百 五 第



B

写真 11

A 菅野徹三 済生学舎明治 21 年卒

(順天堂医学会より使用許諾)

B 順天堂医事研究会雑誌追悼号 (文献 47)

(順天堂医学会より使用許諾)

事楠本正隆に対し貧しい人々を無料で入院させてほしいと東京府施療券及牛痘施種券発行 (甲 67 号)³²や医療支援嘆願書を提出し、病める者に資すべき社会貢献の精神を堅持していました。これらが現在まで日本医科大学の医学研究・医療実践へと引き継がれております。

この稿では、とくに済生学舎出身の代表的医学者である小口忠太、須藤憲三、野口英世、浅川範彦、菅野徹三 5 名の現代および未来にも通じる幾多の教えや言葉を紹介し、各先達の出会いと支え合いから、その人となりについて述べました。

謝辞：本稿執筆において、ポンペをはじめ歴史的内容については元日本医科大学准教授安藤勉先生、野口英世については公益財団法人野口英世記念会森田鉄平先生、浅川範彦については学校法人北里柴三郎研究所北里柴三郎記念室、さらに貴重な古文獻などの資料情報については東京都公文書館資料編纂担当および日本医科大学図書館の皆様にご教示をいただきました。深くお礼申し上げます。

そして、なによりも、医史学研究の先達としてお導きくださった本学同窓の一般社団法人日本医史学会功労会員故唐澤信安先生には衷心より感謝を捧げる次第であります。

本総説は、2020 (令和 2) 年 12 月、日本医科大学で開

催された第 121 回日本医史学会学術大会 (大会長 弦間昭彦 日本医科大学学長) における著者 (弦間・志村) による冒頭講演に基づいております。

Conflict of Interest : 開示すべき利益相反なし。

文 献

1. 日本医科大学の歴史. 日本医科大学校史編纂委員会編. 2001; pp 1-63. 学校法人日本医科大学 東京.
2. にほんいかだいがく [日本医科大学], はせがわやすし [長谷川泰]. 広辞苑第 7 版. 新村 出編. 2018; pp 2229, 2347. 岩波書店 東京.
3. 關屋龍吉: 特別認可学校規則. 明治以降 教育制度発達史 第三卷. 文部省内教育史編纂會編修. 1880; pp 761-765. 龍吟社 東京市.
4. 唐沢信安: 済生学舎と長谷川泰一野口英世や吉岡弥生の学んだ私立医学校. 1996; pp 71-102. 日本医事新報社 東京.
5. 川上 武: 三 救療問題の登場. 現代日本医療史一開業医制の変遷一. 1965; pp 144-145. 勁草書房 東京.
6. 井村寿二: 第二章 明治初年の救貧制度 第一節 恤救規則 附 地方公的救助. 日本の救貧制度. 日本社会事業大学救貧制度研究会編. 1960; pp 56-60. 勁草書房 東京.
7. 医制百年史 (記述編, 資料編共). 厚生省医務局編. 1976; pp 665-694. ぎょうせい 東京.
8. 近代医療保護事業発達史 (上巻). 中央社会事業協会社会事業研究所編. 1943; pp 62-63. 日本評論社 東京.
9. 新村 拓: 第 IV 章 求められる施療 拒否される施療. 近代日本の医療と患者—学用患者の誕生. 2016; pp 243-265. 一般財団法人法政大学出版局 東京.
10. 志村俊郎, 都倉武之: 内務省衛生局長時代としての長谷川泰一前局長後藤新平「事務引継書」と成立法案の検討を中心に. 日本医史学雑誌 2016; 62: 207.
11. 酒井シヅ: 近世社会とコレラ. 疫病の時代. 酒井シヅ

- 編. 1999; pp 84-89, 大修館書店 東京.
12. 橋本鉦市：近代日本における専門職と資格試験制度—
医術開業試験を中心として—, 教育社会学研究 1992;
51: 136-153.
 13. 済生救民一済生学舎で学んだ人々—, 馬越正通, 越野
立夫, 小室陽一編. 2012, 日本医科大学同窓会 東京.
 14. 志村俊郎：第4章 明治期における私立医学校の教
育, 日本医学教育史, 坂井建雄編. 2019; pp 121-132,
東北大学出版会 仙台.
 15. 志村俊郎, 都倉武之, 寺本 明：医術開業後期試験の
臨床実験問題と当時の時代背景について, 日本医史学
雑誌 2018; 64: 180.
 16. 樋口輝雄：医籍の編製について, 日本医史学雑誌
2016; 62: 135.
 17. 長島二三子：五. 生沢クノ, 松本萬年の女弟子たち(松
本荻江, 荻野吟子, 生沢クノ), 長島二三子編. 1999;
pp 31-38, 若葉印刷 東京.
 18. 泉 孝英, 高橋瑞子. 日本近現代医学人名事典 1868-
2011, 泉 孝英編. 2012; pp 369, 医学書院 東京.
 19. 松浪恒夫：夢の扉⑥中原蓮, 夢チャレンジきりり山口
人物伝 Vol.9, 夢チャレンジ出版事業刊行委員会編.
2016; pp 102-119, 公益財団法人山口県ひとつくり財団
生涯学習推進センター 山口.
 20. 唐沢信安：済生学舎廃校の歴史, 日本医史学雑誌
1994; 40: 293-304.
 21. 石橋長英, 小川鼎三：ボンベ・ファン・メールデル
フォールト—お雇い外国人医師の第一号—, お雇い外
国人⑨医学, 1969; pp 54-63, 鹿島出版会 東京.
 22. 幸野 健, 唐沢信安, 山本 鼎, 志村俊郎, 殿崎正明：
フーヘラントの「医戒」と済生学舎の建学の精神につ
いて, 日本医史学会誌 2011; 57: 183.
 23. 司馬遼太郎：医学が変えた近代日本, ボンベ先生と弟
子たち, 司馬遼太郎全講演集 [4] 1988 (II) -1991,
司馬遼太郎編. 2003; pp 43-62, 323-337, 朝日文庫
東京.
 24. 第4節 近代医学の誕生 I. 近代西洋医学の父 ボン
ベ・ファン・メールデルフォールト, 長崎大学医学部
創立 150 周年記念誌, 長崎大学医学部創立 150 周年記
念会編. 2009; pp 38-42, 長崎大学医学部創立 150 周年
記念会 長崎.
 25. 沼田次郎, 荒瀬 進：第二章, ボンベ日本滞在看聞記
新異国叢 10, 1968; pp 284-287, 雄松堂出版 東京.
 26. 江本秀斗：医師の基本的責務 A-6 ヒポクラテスと
医の倫理, 医の倫理の基礎知識 2018 年版. 2018; pp 1-
2 (平成 30 年 8 月 31 日掲載), 公益社団法人日本医師
会 東京.
 27. 嘉門安雄：新潮美術文庫 9 レンブラント, 日本アー
ト・センター編. 1974; pp 7-85, 新潮社 東京.
 28. Ryan SJ: Chapter 19 CSNB with abnormal fundi
Oguchi disease. RETINA Fourth Edition, Volume
One, Basic Science, Inherited Retinal Disease, and
Tumors. 2006; pp 513-514, ELSEVIER MOSBY.
 29. Marcucci L (著), 羽白 清 (翻訳)：医学冠名用語
辞典. 2003; pp 291, 朝倉書店 東京.
 30. 小口忠太：近世眼科屈折編. 1910; pp 1-2, 半田屋医籍
商店 東京市.
 31. 日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会：日本眼科学会
百周年記念誌第 6 巻 日本眼科の史料, 日本眼科学会
百周年記念誌編纂委員会編. 1997; pp 238, 財団法人日
本眼科学会 東京.
 32. 須藤憲三：食物と栄養概論 第 11 回栄養, 須藤憲三
編. 1913; pp 180-194, 元々堂 東京市.
 33. 東京大学医学部医学部附属病院創立 150 周年記念アル
バム編集委員会：「医学生とその時代」東京大学医学
部卒業アルバムにみる日本近代医学の歩み, V 医学部
をめぐる人々. 2008; pp 415, 中央公論新社 東京.
 34. 殿崎正明, 岩崎 一, 志村俊郎, 唐沢信安：済生学舎
出身の旧制金沢医科大学学長須藤憲三に関する新事
実, 日本医史学雑誌 2008; 54: 148.
 35. 井出孫六：世界への助走, 野口英世 岩波ジュニア新
書 472. 2004; pp 59-98, 岩波書店 東京.
 36. 唐沢信安：済生学舎時代の野口英世—細菌学への道
程, 野口英世—21 世紀に生きる, 小暮葉満子, 田崎
(野澤) 公司編. 2004; pp 20-64, 日本経済評論社 東
京.
 37. 野口英世：野口英世書簡集 IV, 財団法人野口英世記
念会編. 2006; pp 41, 財団法人野口英世記念会 福島.
 38. 泉彪之助：衛生学者坪井次郎の経歴と業績, 日本医史
学雑誌 1992; 38: 401-431.
 39. 相田泰三：忍耐は辛苦であるが其の結果は甘美であ
る, 聖なるクリスチャン山口鹿三先生, 鈴木清美編.
1971; pp 31-32, ツノダ孔版社 福島.
 40. Takahashi H, Merli S, Putney SD, et al.: A single
amino acid interchange yields reciprocal CTL
specificities for HIV-1gp160. Science 1989; 246: 118-
121.
 41. Maemondo M, Inoue A, Gemma A, North-East Japan
Study Group, et al.: Gefitinib or chemotherapy for
non-small-cell lung cancer with mutated EGFR. N
Engl J Med 2010; 362: 2380-2388.
 42. 岡本拓司：ノーベル賞文書からみた日本の科学, 1901-
1948 年 (II) 生理学・医学賞 (北里柴三郎から山際勝
三郎まで), 科学技術史 2000; 4: 14-19.
 43. Tonosaki M: Bibliometric analysis by Scopus of
Hideyo Noguchi's articles cited to the articles
published in the world during 1996-2010. Online
Kensaku 2011; 32: 1-12.
 44. 北里柴三郎：7 章後進の育成 浅川範彦, 北里柴三郎—
伝染病の征圧は私の使命—, 学校法人北里研究所 北
里柴三郎記念室編. 2012; pp 91, 学校法人北里研究所
東京.
 45. 浅川範彦：『虎烈刺のむし』付篇予防消毒法, 浅川範
彦編. 1891; pp 1-2, 大和田篤治 東京府.
 46. 小川秀興：『順天堂医事雑誌』復刻を期して—順天堂
医学の歴史—, 順天堂医事雑誌 2013; 59: 2-10.
 47. 佐藤 進, 佐藤 佐, 阿久津三郎ほか：順天堂医事研
究会雑誌第 530 号, 故菅野徹三氏追悼号 1917; 530:
211-215.
 48. ウィルヘルム・ロイベ (著), 菅野徹三 (纂譯)：内
科診断学各論. 1891; pp 1-3, 書肆丸善書店 南江堂
東京市.
 49. 菅野徹三：野口清作君 (餞別の辞), 順天堂医事研
究会雑誌 1898; 279: 42.
 50. ヒポクラテス (著), 大槻真一郎 (編集・翻訳責任)：
第六編品位, 五. ヒポクラテス全集第二巻. 1985;
pp 1006, 産学者学社エンタプライズ 東京.
 51. 志村俊郎：明治期の私立医学校, 医学史事典第 IV
部, 渡部幹夫編, 丸善出版 東京. 2022 年 6 月刊行
予定.
 52. 長谷川泰：「区医職務心得」1877 年明治 10 年 5 月 10
日決済・布達 東京府公文書回議録 (東京都公文書館
蔵収録先の請求番号 608.C8.2).

(受付：2021 年 7 月 9 日)

(受理：2021 年 9 月 30 日)

日本医科大学医学雑誌は、本論文に対して、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際 (CC BY NC ND) ライセンス (<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>) を採用した。ライセンス採用後も、すべての論文の著作権については、日本医科大学医学部が保持するものとする。ライセンスが付与された論文については、非営利目的の場合、元の論文のクレジットを表示することを条件に、すべての者が、ダウンロード、二次使用、複製、再印刷、頒布を行うことができる。